

マルコの福音書 第9章 24節

「するとすぐに、その子の父は叫んで言った。『信じます。不信仰な私をお助けください。』」

この叫びの直前、霊に苦しめられる息子の惨めさに耐えきれず、イエスに助けを願う父親がいます。我が子の悲惨を目の当たりにする親の願いです。「できるものなら、」と願った父にイエスは「できるなら」と言うのかと問います。息子のことを思うなら、「できるなら」どころか、父は「助けてください」と叫びたいところであったと思う。しかし、そのようには言えない父です。なぜでしょうか。助けてもらいたい思いに嘘はありません。しかし、「できるものなら」と言ってしまうのです。絶望して、「できるものなら」と言います。

イエスは父に言います。「できるものなら、と言うのか、信じる者には、どんなことでもできるのです。」父親の姿勢が問われます。息子の助けを求める父の信仰が問われています。息子を助けてほしいのはやまやまです。しかし、そうなるかどうか父自身は定かではありません。だから、「できるものなら」と叫ぶしかありませんでした。しかし、イエスは信じなさいと父に迫ります。父は応答します、「信じます。不信仰な私をお助けください。」息子の助けの前に、先ず、私の不信仰を助けてください。私はイエス様を信じますから。「信じる者には、どんなことでもおできになります。」

2023年1月5日